地域マリンビジョンフォローアップ委員会における各地域への指導・助言（１／２）

地　域	内　容
共通	・ブルーカーボンクレジットの認証量は、同じコンブ養殖でも地域差があるように思われるため、算定量や販売方法について、地域間の情報交流や行政と連携を行い効率的に取り組む必要がある。
遠別 （モデル）	・ふるさと納税返礼品としての活用に加え、タコキムチ以外のタコ製品や、従来から取組んでいるヒラメ等も含めた多角的な情報発信を行うとよい。 ・ダコを強調した商品開発をするという場合でも、何か一定の地域特有のストーリーがあるとよい。 ・タコ類を活用した商品開発や販売を継続するため、タコ類資源の状況や安定性、資源管理も大切である。 ・ヤマト運輸との包括連携協定について、開始時期や物流面での具体的な助言内容、今後どのように事業へ活かすのかを整理して示すとよい。
苫前 （モデル）	・千葉・横浜など道外都市部や、道内イベントで実施しているPR活動について、役場や漁協等がどのように関わり方をしているのか整理すると分かりやすい。 ・人手不足対策として記載されているＡＩ技術の活用について、どの作業や分野での活用を想定しているのか、今後の整理が必要である。
積丹 （モデル）	・ウニと藻場の循環型サイクルについて、概念図に加え、将来的には物質収支など数量的な整理ができると理解が深まる。 ・ウニ殻肥料製造を担う民間企業について、補助金に依存しない形で将来的に自立的な運営が可能となる体制づくりが重要である。 ・ウニ殻肥料の投入前後で藻場が回復している写真について、どのような順序・条件で変化が生じたのかを整理すると理解しやすい。
寿都 （モデル）	・磯焼け対策は、堆肥分解性ブロックの投入だけではなかなか解決できないということだが、専門家に相談するなどして効果的な取組にしてもらいたい。 ・水産加工残渣や木材チップ等を混合したたい肥の取組について、陸上での肥料効果および海域での効果を科学的に検証していく必要がある。 ・堆肥分解性ブロックは、球状のたい肥玉に変更して町民に投入してもらっているようだが、さらなる協力を得るために、イベント化するなど楽しめる工夫を行ってもらいたい。 ・磯焼け対策に長年取り組んでいるため、先進地事例となるよう取組の内容と効果、経緯を記録として残してもらいたい。
奥尻 （推進）	・ブルーカーボンは、将来的にどの程度の規模を目指すのか、中長期的な目標規模を整理するとよい。 ・離島という特性を踏まえ、フェリー会社や航空会社など、環境配慮に関心の高い企業へのアプローチを強化するとよい。 ・環境配慮型の取組は直接的な収益につながりにくいため、漁業者が参加する意義やメリットをどのように伝え、参画を促したのかを整理するとよい。 ・ブルーカーボンの取組が、高校生や民間企業との連携により広がっているため、漁業資源（ウニ等）への効果や漁業との関係性が示されると理解が深まる。
松前 （推進）	・14漁港を対象とした広域の取組であるため、マリンビジョンとして全体を束ねる共通の概念や方向性を明確にする必要がある。 ・魚類・ウニ・ナマコの養殖・放流・移植について、どの漁港で何を重点的に実施しているのか、地域差や重点化が分かる形で整理するとよい。 ・ウニ養殖について、水揚額が高水準に達している点を踏まえ、養殖環境（区画配置や構造）と外的要因（魚類侵入等）との関係を検証する余地がある。
福島 （モデル）	・食育の取組について、児童・生徒や家庭でどのような反応や変化が見られたのか、具体的なエピソードや整理があると分かりやすい。 ・現在の食育の取組は地域内で完結しているため、都市部の小中学校などへの展開や、特産品の普及と結び付けた取組の可能性も考えられる。 ・陸上養殖アワビの需要喚起策は、海業取組促進事業を活用して、令和７年度に先進地視察を行っているが、今後、マリンビジョンの取組としても具体化してもらいたい。
函館(臼尻) （推進）	・天然昆布の回復について、回復が見られる場所とそうでない場所があるため、調査結果を継続的に整理していくことが重要である。 ・未利用魚（太刀魚・八角等）について、飲食店や料理人と連携し、調理方法や食べ方を含めて発信すると、消費拡大につながる可能性がある。
砂原 （推進）	・地方創生伴走支援官の現地視察について、どのような助言や今後の重点が示されたのかを整理するとよい。 ・大学や学生との交流、食育、漁業体験といった取組を実施しているため、WebサイトやSNS等を活用し、交流を継続的な発信や購入行動につなげる工夫が必要である。
室蘭 （モデル）	・藻場養殖の取組が青年部から市内全漁業者へ広がった背景について、どのような動機があったのかを整理するとよい。 ・広域に点在する複数地区の取組について、地域ごとの役割分担や方向性を整理し、全体を束ねる構造やビジョンを明確にするとよい。 ・マリンビジョンを市の水産振興計画のように位置づけて活用している点について、その考え方をプレゼンテーション等で明確に示すと、他地域にも伝わりやすい。

地域マリンビジョンフォローアップ委員会における各地域への指導・助言（２／２）

地　域	内　容
登別・白老 (虎杖浜) (モデル)	・プレジャーボートと漁港利用の共存について、どのように関係づくりを行ってきたのか、そのプロセスを整理するとよい。 ・現在は円滑に進んでいるように見えるが、これまでに生じた課題や調整事項を整理することで、他地域への参考事例となる。
三石 (モデル)	・漁港めしがどのような経緯・企画力（誰の発案・連携）によって事業が立ち上がったのかを整理するとよい。 ・宿泊を伴う出前授業で調理実習の体験が早く終了した点を踏まえ、漁業体験以外の追加体験要素の洗い出しや柔軟な対応が必要である。
様似 (推進)	・昨年度助言への対応欄に記載されている「JBE等からの費用支援の可能性」について、道内にはすでに複数の事例があるため、開発局等、関係する行政機関と協力しながら既存事例や費用感に関する情報収集をしてみるとよい。 ・ナマコ種苗放流や陸上中間育成は、道内各地で長年実施されてきた取組であり、他地域との情報交換・意見交換の場を活用することで、多くの課題が整理・解決できる可能性がある。すでに、交流している可能性はあるが、より体系的な情報共有が有効である。
大津 (モデル)	・船揚場（シップキャリア）整備による防災・減災対策について、実際の地震・津波注意報発表時にどのような行動を取ったのか、ＢＣＰとの関係を含めて整理するとよい。 ・衛生管理体制の確立によって、品質保持や単価向上（資料中で示されている約20%向上）を目指す計画について、実際に関わる漁業者や荷受関係者への周知・理解促進の進め方を整理する必要がある。
厚岸 (モデル)	・宿泊施設不足への対応として、漁家民泊など新たな受入れ形態の検討が重要になる。 ・陸上養殖を含む沿岸養殖の取組について、対象魚種や取組内容を具体化していくとよい。
根室(落石) (モデル)	・民間企業と連携した首都圏向け輸送への取組を単発で終わらせず、継続的な仕組みとしてどのように定着させていくかを整理していくとよい。 ・消費地と関係を築き、新設した加工施設で消費地のニーズに合った加工を行うことで、更なる食材の提供につなげる取組としていくのがよい。
根室(歯舞) (モデル)	・滞在型観光推進に向け、魚津丸の先進地視察を行っているが、歯舞に導入するにあたって、どのような工夫が必要なのか整理するとよい。
羅臼 (モデル)	・藻場造成は、将来的に藻場でウニを育てていくことを想定しているため、ウニの資源量調査も行い、藻場とウニの相関をとりながら取組を進めるのがよい。
ウトロ (モデル)	・釣り人に対するルール設定と啓発活動について、単なる規制ではなく、資源循環の考え方を伝える取組として広げていくことが重要である。 ・自然産卵環境の保全は漁港整備事業と直接結びつきにくいため、漁港施設を活用した観光動線の中で活動内容を伝える工夫等、漁港施設との関連性を示すとよい。
サロマ湖 (モデル)	・観測機器を用いた環境データの共有は、継続的な取組であるため、改良点を整理すると取組の進展がより明確になる。 ・アマモ場が安定している状況を踏まえつつも、研究施設や観測体制が整っている地域特性を活かし、将来的にブルーカーボンへの展開の可能性を検討する余地があるのではないか。
雄武 (モデル)	・元稲府地区に整備されたナマコ専用の養殖・蓄養施設について、現在の活用状況や今後の展開を整理すると、取組の位置づけがより明確になる。 ・雄武町ガストロノミー体験は、地域の歴史や食文化の体験や学習も加えると、参加者に更なる関心を持ってもらうことができる。